

れる點あれど、笑ひは世界の古今を通じて各國各邦いづれも皆これ等しく一様の響を發せり、

また笑ひは人間の感情中、最も愉快に最も平和に最も安樂に最も歡喜せる幸福の反響にして、古今各國の等しきものとすれば、千態萬狀に言語の等しからざる世界の人類をして、いづれの時代にか天この笑ひに一致せしむるの深意あるが如し、

但し泣き笑ひと空笑ひは寧ろ感情の不自然にして、幸福なる神聖の笑ひに反せし虚偽の響なり、

笑ふ門に福來るとは、卑近にして簡略なる俗諺なれど、これを味へば常に絶えざる人生の苦痛を幽言微妙の間より救ひ給へる神の力に似たり、笑ひ聲の漏れざる交際場裡と家庭の内容は、既に不祥を意味し不幸を胚胎す、笑ふものは樂しむ笑はざるものは悲しむ、この理は人間の常なり、

されど幸福の音樂に等しき笑ひ聲も、あまり笑ひ過ぎて其度を越え其道を過れば、寧ろ反對に禍災の太鼓を叩くが如し、

呵しくもないに時と處を選ばず、けらくと高く笑ふもの、用もない人の顔を見詰めて、にやくと低く笑ふもの、口を開いて笑ふべきに鼻で笑ひ肩で笑ひ、目で笑ひ、臍で笑ひ、冷笑、苦笑、くすくす笑ひ、こそく笑ひ、せ、ら笑ひ、ひやかし笑ひ、その他いづれも快樂より出でずして感情の不自然に發する笑ひ聲は、面白くて笑ふにあらず、笑うてやれといふ喧嘩腰の無禮笑ひなり、

但し泣くべきところを泣かず喚かず、ぐツと堪へて寧ろ反對に笑ふものは、同じ感情の不自然より發しながら人間の最も超越せる膽力と決心の響なり、男子この際この笑聲なかるべからず、その極は笑うて斬られ笑うて死に赴くの類、古今の偉人傑物に尠からず、

仰いで呵々たる大笑は、たとひ笑ふの意味に於て完全ならざるも、俯して苦蟲を嚙み潰せしが如きに勝れり、笑うて吐られる奴、泣いて吐られる奴よりは優なり、畫がける如き美人の一笑を萬人惱殺の罪とするは嫉妬のためにして、實は萬人を美化せしむるの快感あり、儼として木像の如き英雄豪傑の一笑また天下の時務に關して何等かの喜あるを知るべく、名士學者の破顔一笑さらに四邊の平和を誘ふの力あり、むつかしき阿爺の眼鏡越しに笑ふ時は家内安全の基たり、馬鹿笑ひ、白癡笑ひ、狂氣笑ひ、これさへ馬鹿の腹立と白癡の愚癡と狂氣の無言に睨む危險よりは遙に太平の象を含めり、木の葉の散るも呵しく箸の倒れたにも口を掩うて笑ふは鬼も十八の愛敬といふ、あらずや、笑顔、笑窪、その聲を發せざるも、その人の満面に溢る、快樂の表情にして、希望に伴ひ得意に伴ひ勝利に伴ひ成功に伴ふべきもの、絶望と失意と破壊と悲哀に笑の伴ふべき筈なし、

笑うて濟む事は、たとひ敗れたりと雖も必ず挽回の見込あり、笑うて損する時は、たとひ失へりと雖も更に後悔の念なし、笑うて寢る時、笑うて起きる時、笑うて歩む時、笑うて働く時、いづれも皆これ人間の幸福に生けるがためにして、この笑ひ聲の禁物は死んだ時の挨拶と病人の見舞だけなり、

一 涙

涙は人間の目に溢る、水なれど、もろくの快樂と幸福の感情より發する笑ひ聲の正反對に、さまざまの悲哀と憂愁の根柢より涙管を絞り出されて、堪へ難き人生の不幸を語り難きところに表はせるものなり、おもはず溢る、嬉し涙あれど、涙の原因と分量は悲しき極點に最も多く、目に塵埃の入りし時これを流し出す涙は無意味にして自然の人體作用なり、

涙瀧の如しとは白髪三千丈の支那流に雷聲の如しと一般、身を浮くばかり袖を濡らすも亦あまりに日本流の大業なり、一滴二滴三滴七八滴、その多きも數十滴、たらたらと目より流れて頬を傳ひ、これを拭へば死別生別の際もハンカチーフ一枚ぐらゐるを濕すのみ、いかなる悲しみに逢うても思ふ存分、めちやくくに泣けばとて、それ以上に出るものでなし、

また血の涙といふは、血を吐くが如き苦痛悲惨の形容詞にして、何人の涙も血涙にあらず、紅涙にあらず、まして紛々たる涙痕を止むべき筈なく、實は男女賢愚ともに一様の無色透明なり、但し舐めて味へば聊か鹽氣を帯びたり、されど一滴の涙は人間無量の感情を語り盡して、間斷なき百日の雄辯よりも深刻なる意味を寓する事あり、さらに一滴の涙その人を得て國家に注げば、よく天下を動かすに足る、千古の歴史に互りて常に崇拜せらるゝものは皆この涙を以て常に感謝せらる

るものなり、

舐めて鹽氣を感じる外に何の味ひなく、わづかに一枚のハンカチーフを濡らす以上に分量なき涙の力も、また時と人と事によりて、實に偉大なる哉、

尊重すべき偉人の涙一滴は不換金の寶涙なれど、たゞの奴が泣くにも足らざる事を泣き明し泣き暮して、べそくと濕り勝なる駄涙は常に絶えず絞り出しても一文の價値なし、

つまり泣くに泣くもの、甚しき相違あり、同じ目より溢るゝ涙に涙を流す事の甚しき差別あるのみ、

結局、涙は時代と人間の標準價格なり、

今日の人間そもく涙ありや、涙あれど尊重すべき有用の涙は頗る少くして、たゞ入らざる不用の涙と眞心なき空涙のみ案外に多きが如し、

加之も泣く隙なく泣く事の最も不得手なるべき青年男女に最も泣く隙ありて泣き上手のもの多く、これを自ら感情發達の遺憾なき高等人類と誇り、日光炎天の空は焼くが如く照り續くも常に涙管の乾ける時なくして、ちよいと觸れば直に涙の流れ出る工合、殆ど紙袋に水を盛れるが如し、

つまらぬ事にも忽ち目を掩うて、よく泣くものを泣蟲といへど、今日の彼等は涙を以て意味ある生命の露とし泣くを以て最も人間の清き叫びと稱せり、

泣蟲これ弱蟲といへど、今日の彼等は人間の弱蟲となりしを以て他の動物に異なれる特徴とし、ますます原始時代の野蠻に遠ざかりし唯一の立證と稱せり、

今日の彼等は右に泣き左に泣き前に泣き後に泣き、仰いで泣き俯して泣き、起きて泣き寝て泣き、戀に泣き愛に泣き詩に泣き歌に泣き星に泣き董に泣き、小説に泣き美術に泣き演劇に泣き、境遇に泣き社會に泣き煩悶に泣き悲觀に泣き酒に泣き牡丹餅に泣

き、その他あらゆる總ての事々物々に泣いて日を送り泣いて夜を明かすもの、夏の蟬も秋の蟋蟀も泣き止む時節あるに、何ぞ彼等の泣き已まざる、多量豊富いか不用の涙ありとも、いまだ泣き草臥れざるが不思議なり、

或人曰く、彼等は正直なる感情の極より正直なる涙を流して泣くにあらず、また堪へ難き木氣の沙汰より悲哀に迫り憂苦に陥りて泣くほどの經驗も責任もなし、たゞ徒らに泣くを誇り泣くを自慢し泣く事を稽古せし結果、空泣きに泣き工合を覚えて泣癖の付きしがためなりと、あたら青年男女に癖も癖なり、なさけない癖の付いたもの哉、人として泣くべき事に泣かざるものは、感情の麻痺せし冷酷残忍、殆ど木石に類すれど、女々しく泣くべからざる事に泣くのは、感情の病的となりし薄志弱行、逆も世の中に立入りて競争場裡の勇者たるべき資格なし、

涙は人間これを表情の最も大切なる貴重な液として、妄りに溢さず妄りに出さず容易

に流さず、なるべく涙管の口を塞いで奥深く秘藏すべし、
 口で泣くよりも腹で泣くもの、目で泣くよりも心で泣くもの、これを男子の涙といふ、
 もし涙を以て人を救はゞ一滴の涙よく大船を浮ぶに足るほどの力を以て泣くべし、だ
 らくくと正體なく涙と水漬と混合するが如き泣き振は更に何の功なく、加之も人とし
 て最も恥づべき醜の極なり、

一 流行

流行を善意に解釋すれば、時代の潮流なり、時勢の要求なり、人心の影響なり、進歩
 の伴侶なり、向上の氣運なり、
 流行を惡意に解釋すれば、時代の逆流なり時勢の腐敗なり、人心の墮落なり、進歩の
 阻害なり、向上の破壊なり、

善惡いづれにせよ、流行なるものは最も時を動かすの力あり最も人を動かすの力あり
 て、加之も新舊取捨の間に起るがため、勢ひ常に新舊の衝突を免れざること多し、
 社會は新舊取捨の間に進み人間また新舊衝突の間に進むものとすれば、この流行は世
 の中に對する進歩競争の命令者として、流行に先んずるもの世に先んじ、流行に後
 るもの世に後る、ものとせざるべからず、されど流行もし一步を過れば、世の中に對
 する安寧秩序の攪亂者として、社會は流行のために掻き廻され人間は流行のために追
 ひ廻さるゝの恐れあり、

さらに流行は人爲と自然の兩面を有し、また有形と無形の兩様を有せり、
 人爲的の流行は多く有形の物質上に屬して金錢の購買力これに伴ふがため、多少その
 道を過るも經濟に餘儀なき防禦線あり社會また常に矯正訓戒の忠告を怠らざれど、自
 然の流行は多く無形の心理上に向うて加之も自由自在の無代價に得らるゝがため、一

點の過誤は忽ち寒心すべき天下の過誤となり、附和雷同の結果、動もすれば却つて社會を風靡し社會を強制し社會を席卷するの大危険あり、加之も流行の傳播力と感化力は殆ど一種の魔力と速力とを有して、その波及するところ、その通過するところ、舊態舊狀の何物をも粉粹せざれば已まざるの勢ひあり、石が流れて木の葉が沈むの語、この流行力には敢て何の不思議もなし、また流行は常に前途の短き老人を捨て、前途の長き青年を覘ひ、これを誘拐し、これを教唆し、その好奇心を迎へ、その虚榮心に乘じ、その弱點を捉へて狂喜せしむるの結果、沈思黙考の餘地なく思慮分別の違なからしむ、いはゆる流行兒の只これ流行に後るゝを恐るゝ所以なり、政治家の惡辣なるもの、常に此流行力を天下の大勢に結び付けて、ますくその辣腕を振ひ、營利的の機敏なるもの、常に此流行力を社會の好餌に投じて、いよくその

利益を釣り、學者の論議これがために曲學阿世の罪を免れ、文士の著述これがために新しき試みを名として勝手な熱を吹き、新聞記者の如きは最も巧みに流行力を利用して先覺者たるの便あり、たとひ流行を輕挑浮華の産物とせずして、これを社會の需用に應ぜし進歩發展の立證とするも、流行は流行に化せられて流行兒となるの前まづ其流行熱の來るところを冷酷なる頭腦に容れて緻密なる利害得失の打算上に考へざるべからず、

社會の流行を知らざるものは其日の晴雨を知らざると一般、全然これ社會に没交渉の閑人なれど、あまり社會の流行に囚はれて流行以外の社會を忘るゝは闇夜に燈を失ふと一般、全然これは盲目滅法なり、流行兒たるを誇るの極その流行の捕虜となるものは別として、流行を追ふものと流行を追はざるものと、兩者いづれに人物ありといへば、當世才子として追ふものよりも

一定の主義を守りて追はざるものに人物の多きは、いかなる場合にも事實にも争ふべからず、つまり流行は根柢の薄弱なる浮動物なり、結局、流行は永久的の性を帯びたる確定物にあらずして、その根柢の薄弱なる浮動物たるが故に猶更ら恐るべき點あり、これを眼前の物質上に止むれば一時の社會繁榮策と見るべきも、もしこれを意志いまだ定まらざる青年男女の心理上に過れば、相率ゐて狂奔するところ殆ど天下の大事たるべし、

一 旅行

旅を憂きものとして露けき袖に哀れを包み故郷の夢に枕を欹てしは、山河隔絶の交通不便なりし昔の旅行なり、花に涙を注ぎし他國の春も、月に腸を斷ちし客窓の秋も、汽車汽船を知らざりし昔の旅行なり、詩人また一朝の別離に天涯の孤客を悲しみ、歌

人また雲井の空に泣いて思ひを寄せ、夫婦の別れ、親子の別れ、朋友知己の別れに水盃を取交せしは、取交す寫眞もなく電報も郵便もなき昔の旅行なり、つまり昔の旅は門外一步の生別これ死別を兼ねて、最も運命の不幸を意味せし人間生涯の悲惨事なれど、今日の旅行は快樂と利益を談笑の間に兼ねて、最も境遇の安樂を意味せし人間希望の幸運兒なり、昔は旅するもの、心を憐れみて、旅の空の憂き苦勞を嘸やと思ひやりしが、今日は旅するもの、心を羨みて、旅の空の爲たい三昧を癢に觸るもの多し、今日の人間として旅行を喜ばず旅行を好まざるものは殆ど病人なり、否、病人も病院の病室に呻吟せざる病人は、寧ろ却つて風土の異なるところに養生の效ありとし、寒暖の氣候に應じて四方に身を運ぶもの多く、中には叩き殺しても急に死せざるほどの達者な奴が、わざと病人らしく人を欺まして旅の空へ遁け出す横着者あり、

病人らしく人を欺して旅行するもの、まだ恕すべきも、室内旅行を企て、折角の來客を玄關拂ひにする奴、なほさら罪深く言語道斷なり、さらに最も横着なる奴は、餘儀なき要用のため己むを得ざる旅行に迫られたるが如く、眉を蹙めて迷惑顔に家を出でながら、家を出づるや否、内々そつと方角の違ひしステーションへ駈けつけ、けしからん女の手を引いて一時的の新婚旅行を年が年中に繰返す奴あり、今日の家族たるもの、行く先と還る目と用事の曖昧なる主人の旅行には決して油斷すべからず、此等は旅行にあらずして醜行なり、要用の旅は一人の簡易輕便を主とし、快樂の旅は家族同伴を主とし、こゝに始めて完全なる旅行の意味ありといふべし、旅行は旅行の目的にあらずして旅行せざるべからざる必要の場合と、快樂の變化なきがため家族相伴うて旅行を目的とする場合の外、既に門戸を張りて金錢の自由なるも

のが飄然、ひよこりと出る一人旅は十中の八九、山水の探勝も名所の土産物も繪端書も實は頗る怪しいものなり、妻子あり家族あるものは別として、いまだ家を成さざる今日の少壯者には、最も平民主義の一人旅を奨励し勸誘し實は強ひても脊を打ち尻を押し出すの必要あり、金錢に不自由なるがため旅行する能はずとは、旅行を以て贅澤なるものとし旅行は日常の生活以上たたらざるべからずとするがためにして、もし時日さへ許せば旅行それ寧ろ都門の物價よりも遙に安直なり、健脚一步その居を去つて見よ、いたるところ青山綠水あるにあらずや、加之も天地の大自然に興行されたる美觀場には所有者なく混雜なく一文の木戸錢なし、單純なる旅行に最も單純ならざる趣味あり、簡易なる旅行に最も簡易ならざる興味あり、平民的の旅行には貴族的の夢にも知らざる快樂あり、てくく歩いて汽笛一聲に

驚かされ、これを馬鹿氣たりとするは、鐵路なるもの最も平坦なるところを選びて驛より驛に敷設せるの理由を解せざるがためなり、停車場に近く煤煙の届くところに我を忘るゝの風色あらんや、都會のビヤホールに一時間の散財は以て山間の宿に一日を過すべし、生きた人間を物品の取扱ひせらるゝ演劇音曲その他の興行場に一日を費すの料あらば水や空なる海濱の青松白砂に身を横へて半歳の勞苦を忘るべし、塵埃に埋もれたる下宿屋の二階に乾燥無味の不衛生なる食を取つて風俗壞亂の禁止に間一髪を容れざる小説を讀むよりは、片田舎の樹蔭に憩ひ細流に口を嗽ぎ掘りたての芋を喰ひ遠慮なく屁でも垂れて暢氣に野良唄の詩味を感じ詩趣を愛すべし、たま／＼この詩味と詩趣に適せざるハイカラ男の白粉臭き廂髪に搦み合ひ纏れ合つて迷ひ來らば、これがため變に悲觀して妙な心を起すべからず、寧ろ諧謔一番、目に觸る風流罪の罰金として洒落半分に貰の二三本を強奪するの勇あるべし、

山水の風景は古今ともに到るところ無代價なり、田舎も別莊の見えざるところは物價の至廉なるところなり、旅行もし時日を許さざれば、許さるゝ時日の範圍内に於て常に絶えず都門の風塵を避くべし、學業と職務のため餘暇なきものは旅行の範圍を縮めて幸ひ一週間に一度の終日を郊外の人たるべし、その土曜も日曜も職に追はれ學に追はるゝが如きもの、平生の用意と勉強を疑ふべきのみならず、これは晦日前に狂人の如く働き試験前に青くなりて身體の目方を減す奴なり、加之も元氣と血氣の充滿せる學生時代には夏期と冬期の休暇ありて、これを利用すれば山川踏破の快を貪るに足る、今日の青年學生その歸省を名とし父兄に見ゆるの急を告げて、この逸すべからざる一年二度の賜物を寝ながら汽車汽船に運ばるゝが如きは、無策無用、薄志弱行、殆ど笑ふべく憐れむべく歎すべく惜しむべし、

故郷に歸省の最も愉快なるは他郷に修養の最も長き後なり、父兄に見ゆるの効果あるは修學の半途にあらず卒業の後にあり、もし慰藉慰安を與ふるがためならば、いまだ一人前にならざる半出來の面を御覽に入れるよりも、爾後ますます元氣に達者な脛を飛ばして、父兄の御存じなき山海の風景と名所舊蹟を文章に詩歌に繪畫に朝夕轉々いたるところより面白く供し面白く呈すべし、一は以て其後の進歩發達を報ずるに足る、

もしこれを不可とする父兄あらば父兄の無策無用なり父兄の薄志弱行なり、最愛の子弟を他に學ばしめず自家の柱に縛り付け置いて小鳥の如く摺餌を與へ、その餌の絶えたる時は自己の向脛を嚙らすべし、

つまり旅行は人間の清涼劑にして家庭の保護物なり、靜なる家庭は動ける旅行を以て猶更ら圓滿を保つべく、旅行の快樂と家庭の快樂とを併せ得て兩々その意味を失はざ

るもの、こゝに始めて人生の最大幸福者たるべし、

一 酒と葺

醫學上より研究されたる酒と葺の害は別とし、衛生上より警告されたる酒と葺の害は別とし、この酒、この葺、そもく人間の存在上に實際いかなる影響を來すべきや、生命を保つべき人間の食物にあらずして、その最も高價なるものは酒と葺なり、

葺は既に官營事業なれど、外國輸入の葺を課せらるゝ海關税と年々の酒造税とは、税金中の最も高きものなり、

最も高價なるものにして最も消滅の早きものは、海陸戦争の損害に次いで太平無事の酒と葺なり、加之も酒と葺は最も消費者の嗜好物にして最も不經濟の極點物なり、酒なきがために人は死せず葺なきがために人は病まざるも、この酒なきがために死せ

るが如く生氣を失ふもの多く、この莨なきがために病めるが如く活氣を失ふもの、多
 き點より、酒と莨の害を叫ぶもの一喝して曰く、これ中毒なりと、
 中毒は恐るべし、中毒の一喝は生命貴重の人間として、もはや争ふべからず、されど
 一面また中毒せざるものは殆ど中毒せるが如きものあり、由來、中藥の熟語なきも、
 その身に名藥の適中と等しきをいふ、

よく酒をして百藥の長たらしめ、よく莨をして憂き事の忘れ草たらしめ、この酒に寧
 る生氣を添へ、この莨に寧ろ活氣を増し、有害なる酒と莨を以て有益なる社會の必要
 人物たるもの尠からず、もし中毒論者これに對すれば、中毒すべき筈の酒にも莨にも
 中毒せざる奴は何を喫うても傷らざる豚に等しきものといふべきか、
 中毒論者より豚と見らるゝも可なり、豚にあらずして身體強壯に胃腑の健全なるもの、
 この酒に産を破り身を亡さざれば大に飲んで、大に働くべし、この莨に我を失ひ務を

煙とせざれば快く喫して快く稼ぐべし、

生來この酒と莨を好まずして大に働き快く稼ぐものは、固より瑕瑾なき人間なれど、
 もし酒と莨に無量の趣味あり無量の快感あるもの、その酒と莨のため惰氣返り鬱ぎ込
 んで死人の如く病人の如くなるべからず、いかに酒と莨は食物以外に無用の高價たり
 とも、その無用の用を知り食物以外の高價を苦しめて社會に活動するもの、寧ろ
 却つて社會進歩の運轉手たるを得べし、贅澤を贅澤とせず贅澤に驚かずして贅澤以上
 の目的に進むは、或意味に於ける人間向上の一端なり、

禁酒禁煙を以て道德上の一大急務なるが如くに叫ぶは、あまりに打つ槌の小にして道
 徳の貫目を輕んずるの恐れあり、禁酒禁煙に人間の克己心を盡して、禁酒禁煙の外に
 克己心の種切となるが如きは、あまり人間の力を粗末に亂發に使ひ過ぎたり、禁酒禁
 煙は道德數字のコンマ以下にして克己心の餘り汗を用ふれば足れり、

いはゆるアルコール中毒もニコチン中毒も、既に中毒せし病的と中毒すべき體質を醫學上より研究せし最小部分の一科目にして、人間の常食も生涯の長き常食中に知らず識らずの間、いかなる多年の毒素を蓄積すべきか、病氣病死の悉く天命にあらざるは多年常食の滋養分に差引かれし残部の禍害なり、

いちく／＼醫者のいふ事を聞けば醫者の研究材料となるの外なく、いちく／＼衛生家の注文通りに従へば衛生所の試験物となるの外なく、人間の一晝夜に呼吸する空氣の分量は千二百九十餘萬センチメートルにして其一立方メートルに二萬有餘の細菌が盛に活動し勇躍するといふにあらざるや、この講釋を聞けば人間どこも歩けず動けず立往生して細菌に攻め殺さるゝ筈なり、

酒と葷は世界の到るところ人間の棲むところ、風俗習慣の異なるに關せず常食嗜好の異なるに關せず、いかなる未開の野蠻國も文明の先進國も、これを用ひざる邦土

なく人種なく、たゞ精粗繁簡の差あるのみ、加之も酒と葷は人間以外の動物中に於て、いかなる猛獸も怪禽も、これを恐れざるものなく、これに驚かざるものなく、獸王のライオンも鼻頭に一吹の煙を送れば忽ち辟易し、巨體の象も馬も一盃の酒を與ふれば忽ち昏倒す、これを好みて飲み、これを喜び、吸ふもの、たゞ動物の最長上に位せる人間あるのみ、酒と葷は人類に許されたる特殊の産物なり、

世界を通じて天の産物この人類のみに特許されたる酒と葷は、その快味と快感を感謝するに止まらず、これを人類發展の興奮劑として、大に活動すべし大に蹶起すべし、酒に罪を嫁し葷に罪を嫁して酒のために倒れ葷のために事を缺くが如きは、天産の特許物に對して相濟まざるのみならず、これを利用せずして悪用する愚劣な奴なり、

もし酒と葷に害ありとすれば、その害は酒と葷にあらざして人にあり、

一手と口

手も口も一人の所有なれど、手の人と、口の人と、世間これを二人に呼ぶ、その長所のみを擧ぐるがためなり、手に長ぜし人は口に疎く、口に長ぜし人は手に疎く、口の達者なるものは多く手が届かずして、手の届くものは多く口の訥辯なるものなり、口の人には議論家にして舌鋒に人を征服するの力あれど、動もすれば机上の空論に屬して烟水練の名人となる恐れあり、手の人は實行家にして辣腕に人を征服するの力あれど、動もすれば縦横無盡にして目的のために手段を選ばざる危険分子を含めり、口に長じ手に長じ、おのゝ人に過ぎたる長所を備へて、いはゆる口も八丁に手も八

丁の兩刀使ひは、口と手と同時に出来る裏長屋の喧嘩に絶えず多けれど、實業界、政治界、その他いづれも社會の表面に現はれたるものとしては、口に長ずるか手に長ずるか、其一方に偏して、これを兼備せるもの極めて少し、これを兼備せるが如くに見ゆるものは、その實これを兼備せるにあらず、口も手も等しく及ぶべき範圍内に於て兼備せるのみ、もし全力を擧げて事に當れば必ず長短あるべし、天は二物を與へず人は二個の長所を併せ得ざるものとすれば、口によりて業を営むものによりて業を営むものは別として、口と手の兩方いづれに最も人間の眞價ありや、一場の演説に天下の大勢を動かし一席の座談に社會の大事を決するが如きは、こゝに引用すべからざる例外の偉物として、世間普通の狀態に於ける世間普通の人間は、手

よりも口の出し易きと、手よりも口の入れ易きと、手よりも口の自己を誇るに便利なると、手よりも口の責任を免るゝに簡易なると、手よりも口の勞苦なくして時間を費さざると、手よりも口の人を喜ばしむるに無代價なると、その他の萬事に手よりも口の自由自在なるがため、勢ひ手の人より口の人に浮華なるもの多く、輕薄なるもの多く油斷のならぬもの多く、中には懐手のまゝ大口を開いて他人の家藏を一呑みにせんとする奴あり、たゞ口だけで濟めば即座に何でも引受けるといふ頼りない奴あり、つまり口の人には口の人なり、

口は人間の意志を正直に發表し告白するものなれど、また口は變化自在なるがため不正直に却つて意志の反對を語り心にもない事をいふもの多く、口は調法の諺ありて所謂大言壯語は既に事實と相伴はざるが故の大言壯語なり、これに反して手の人には事々物々に形跡を顯はし効果を擧げざるべからず、口の入は坐

して舌を動かすの時、手の方は動いて何事をか着手するの時なり、饒舌らずに黙つて働けとは、口の人に對する最後の鐵槌なれど、手の方は最初より饒舌らずに黙つて働けり、口輕きと手堅きの對照語は總ての上に及ぼして、もし誠實と確定と結果の有効なるとを求むれば、口の人よりも手の人に多き筈なり、口を開くと手を下すと、これを優劣なき同じ場合に同じ人間に見るも、結局、口の方は勢ひ遊意に流れ易く無益に傾き易く放縱散漫に陥り易く、手の方は勢ひ勤勉たらざるべからず有益たらざるべからず、確實堅固たらざるべからず、口にいふは易くして手に行ふは難し、その易きところに喋々たるものと、その難きところに致々たるものと、既に性格の根柢より違へり、いかに雄辯なるも口の人その口の過れば忽ち空論暴議となるの恐れあり、たとひ手腕なきも手の人その手を止めざれば竟に不言實行の功あり、

もし口を禍の門とすれば、手は福に入るの門といふべし。

一 才と智

才も智も同じ心の根に生ずれど、その枝振を異にして、才子と智者は向ふところに同じからざるものあり、

才は動き智は静にして、才は一方の戦鬪に於ける勇士の如く、智は全體の大局に關する將軍の如し、

才子に當面の策略あり、智者に遠慮の深謀あり、才は一時的のものにして智は永久的のものなり、才は軽く近く小にして智は重く遠く大なり、

智者にして才子を驅使するものあれど、才子にして智者を左右するものなく、才子その才を待みて事を過れど、智者その智を以て事を破らず、動もすれば才子に片々たる

鼠輩あれど、いかなる時も智者に輕薄の小人なし、

智は先見の明に照らして人生の行路中、最も平坦なる大道を悠々と躡かざるが如く歩み、才は健脚に誇りて道を選ばざるがため、をりく曲折の岐路を走り荆棘を走りて向脛を傷つけ足の裏を損ふ事あり、

才子は急流の如く智者は深淵の如し、急流は岸を噛み巖に激して見るに快なれど底淺く、深淵は常に波紋を描かずして棹せども底を知るべからず、

才子は叩いて音あり、智者は叩いても音なし、

才子いかにも才子らしけれど、智者は案外に智者らしからず、才は顯はれて發し、智は藏れて潜めり、

あれは遣り手といはるゝもの才子なり、これは分らぬといはるゝものに智者あり、動もすれば世間この智と才を混同して、智の小なるものを小智慧と稱し、鼻の頭あぶ

ない智慧の置き所と笑へど、元來これは小智慧にあらずして猪小才なり、智は大小に
 關せず、厚薄に關せず、大小厚薄おの／＼その程度に遺算なく遺漏なきもの、たゞ才
 の小なるもの、いはゆる小才子は眼前の小器用と小氣轉にして、あまり小股の小伶俐
 に立廻り驅け歩くがため、常に絶えず間斷なき小出入と小運轉の總勘定を見れば、さ
 らに何事もなさざる平凡の人間より寧ろ却つて馬鹿を演ずる事あり、
 智は常に事物の局外より其真相を過らずして事に處するもの、才は常に事物の局内を
 回轉するがため其真相を過りて事に敗るゝの恐れあり、才子は多く才ならざる時ある
 も智者は常に智ならざる時なし、
 大才と奇才は殆ど智に近きものとして、世間の普通一般に稱せらるゝ才子なるものは、
 うか／＼その才子に許すべからざると共に本人また頗る自己の才子たるに用心すべき
 點あり、才子は多く事に當り多く事を爲すがためなれど、社會の損害と人生の失敗は

智者と馬鹿にあらずして智者と馬鹿の間を驅け廻る才子才物の請負仕事なるが如き觀
 あり、
 彼奴あの才があるため安心が出来ぬといはるゝ才子多く、惜しい事には彼奴あの才が
 邪魔して使へぬといはるゝ才子多く、あの才がなければ彼奴あゝでもあるまいと歎息
 せらるゝ才子多し、才子また折角の才を抱いて災難なる哉、
 されど才は愚にあらず、才子その才を遺憾なく有用たらしめんとすれば、持ち合せの
 才を其まゝ他人の面前に振廻さず、急かす慌てず靜に考へ徐ろに慮りて智者を師と
 して智者を學ぶべし、馬鹿は智者の眞似すべからざるも、幸ひ其中間に位せる才子こ
 こに意を用ひて修養すれば敢て難きにあらず、才を進めて智となすも得べし、
 つまり才子の才は事の半途に於ける才にして智者の智は事の結果に於ける智なり、十
 里の道を行くに智者は二十里の健脚を以て靜に歩みながら早く達し、二十里の道を行

くに才子は五里の脚を飛ばして一息に駆け出さんとし、加之も其向脛に馬の字を書いて急ゆるが如し、

一 情と理

情は所謂人情にして、理は即ち理性なり、
 情理ともに併せ得て並行すれば、いかなる場合も凡そ人生に何等の蹉躓なく何等の失敗なきも、奈何せん情の人と理の人は殆ど別なり、
 情に脆きものは涙に脆くして事に當るの力また強からず、理に敏きものは利害の數に敏くして事を處するの力また弱からず、情と理の差別ここにある、
 理の人は決心と斷行力に富めるがため、心強く世間に對して自己を守るの用意また堅固なれど、動もすれば冷かにして他を顧みざるところあり、

情の人は同情に引かれ易く人情に搦まれ易きがため、心弱く世間に對して自己を守るの用意また薄弱なれど、常に暖味ありて他を捨てざるところあり、
 理の人は理のために事を忍び情の人は情のために事を忍ぶ能はず、少々は氣の毒に思へど理の人は一言の下に斷然と他人の依頼を跳ね付けて身に迷惑を蒙らず、ない袖は振れず成行は致方なしと濟まし込めど、逆も出來ざる事さへ情の人は餘儀なく引受けて他人のために自己を苦しめ、果は其まゝ居堪らずに遁け出す事あり、
 依頼するものより見れば、癢に觸れど理の人は事に早くして寧ろ結果を諦め易く、有難けれど情の人は事に遅くして寧ろ結果を諦め難し、
 理の人は自己本位に重きを置いて、もし他を救へば其あまれるを施し、情の人は自己を他に及ぼして、たとひ餘らざるも割いて與ふ、
 與へられ救はれるものより見れば、同一物を得たりとするも、理の人に對する感謝

の念は薄くして、情の人に對する感謝の念は厚し、
但し理の人と情の人と戦へば、理は常に情を壓し情は絶えず理に壓せられて、勝敗の
數は自ら明白なり、

情は暖かなれど理に暗ければ却つて自他に害あり、理は冷かなれど迷はざるがため寧
ろ自他を煩はすこと却つて妙し、

まして生存競争の激烈なる社會に立ちては、かぎりあるの情を以て限りなき世に處す
るよりは事々物々に對して取捨の鮮明なる理を以て世に處すべし、

つまり情は廣く淺く四方へ散逸すべからず、これを深く厚く妻子眷族朋友知己の間に
暖むべし、いかに暖かならんとするも門外一步の風塵に吹かれては餘熱を保つべき筈
なし、

加之も大事を決し大事を擔ひ大事に處するものは、最も冷靜なる態度を以て顧慮なく

躊躇なき理性の人たらざるべからず、堅忍不拔も泰然自若も快刀に亂麻を斷つが如き
も、意志に弱く對抗に脆くして説かれ易く傾き易く引かれ易き情の人は到底その任に
當るべき力なし、

いよく以て情は猶更ら親しき間を濃かに暖むべきものなり、情は人と人との交はり
に於て必要これなかるべからざるも、人と事との間に於ては必ずしも其情なきを咎む
べからず、情は情のために泣くべきものにして、理は理の上に事を處すべきものな
り、

事を處すべき理を以て情に臨めば、餘儀なき結果として勢ひ冷酷なるが如きも、情に
泣くべき情を以て事に處せんとすれば、自然の數として勢ひ失敗に終らざるべから
ず、

情のない奴とは、多く自己の勝手にならざるものを罵る時の言葉なり、情なし猿とは、

多く自己の依頼を容れざるものに對して畜生呼ばはりする時の恨みなり、石の如く瓦の如く元來の無情漢は別なれど、いち／＼他人の勝手に押へられ他人の都合に制せられて、情のありだけを剥ぎ取らるゝが如きものは、寧ろ情の人にあらずして癡の人なり、

繁華雑踏の巷に僅の財布を固く握りて盗兒の用心すれど、常に物騒千萬なる世間この情に對する盜兒を用心せざるがため、人情を以て規はれ人情を以て欺かれ人情を以て口説き落され人情を以て泣き込まれし結果、あまり人情を引出され過ぎて人情倒れに斃るゝのも尠からず、人情は人間の美點なれど、この人情は輕薄ならざるを以て他人に向ふの程度とすべし、相手の如何を見定めずして妄りに人情を振舞へば、振舞ひ切れざるがために却つて相手を失望せしむること多し、

川柳の名句に曰く、人に物たゞやるにさへ下手があり、たゞ物を人に與ふるは上手も下手もなき筈なれど、代價を取つて物を賣るよりも實は難しきの理こゝにあり、

一新舊

新舊の衝突は自然の大勢にして、いつれの時代にも避くべからず、いかなる場合にも免るべからず、

わけて今日の社會は總ての上に人心の向背いまだ定まらざるがため、猶更ら事々物々この新舊に衝突し事々物々この新舊に紛亂せる過度時代なり、
くりかへすもの歴史のみにあらず、流行の袖模様も意匠の極は昔に立戻り、温故知新は人事一切を支配して、舊は新を生じ新は舊に依り、新舊の關係は聯環の如く相伴うて密接に離るべからざるものなれど、今日の人間は新舊こゝに相敵視して、思想の衝突、趣味の衝突、觀察の衝突、競争の衝突、利益の衝突、風俗習慣の衝突、交際場裡

の衝突、汽車の衝突、電車の衝突、自動車と荷車の衝突、あけても暮れても衝突だらけに衝突して、たゞ古き人と新しき人と摺み合の喧嘩腰に立騒けり、新しき人とは何ぞや、後等みづから稱するところは、社會人生あらゆる總ての舊狀舊態を脱却して新思想と新趣味の權威者なりと叫べど、實は穩健なる舊狀舊態より叩き出されし前科者にして、加之も誠實の意味を有せる新思想と新趣味に迎へられざるのみか玄關拂ひ以上の門前拂ひを喰ひしものなり、今更ら後へも戻れず先へも行かれず世の中の中有に迷ひ心の波の半途に浮かされて、自暴半分の捨鉢に好きな囁言を竝べ勝手な熱を吹くもの、本人どもは頻りに時代の産物なりといへど、時代は彼等を産んだ覚えなしと異議を唱へ、現在の親さへ持て餘して世間體あれば貰ひ子なりと申譯するほどの厄介物なり、

彼等の女流また常に絶えず本能主義を叫び眼前刹那の快樂主義を叫びて、盛に肉の開

放を吹聴し廣告すれば、無人島にでも流されて餘儀なき差對ひにあらざるかぎり、誰が好奇心に彼等の肉を開放されて喜ぶべきや、

時代の新思想も新趣味も、これを鼓吹し奨勵して眞實に導くもの別に其方法と其人あるべし、もし彼等の口より叫ばるゝが如く手輕に安直の社會ならば社會それ一日も保つべからず、もし彼等の絶叫を要し手腕を待つべき世の中とすれば、この世の中は張子細工か糊細工たらざるべからず、

これに反せる古き人また餘りに古過ぎて微臭く死骸臭し、社會は一の活動物にして人間は向上の約束に生れたるを知らず、古下駄の缺け願も物いふ時節ありと心得、はうろくの破片も三年目には用に立つのみを辨へたる外、この駸々たる天下の大勢を解せず、競争場裡の置去りに逢うて徒らに世を歎じ人を呪ひ、文明の利器は道德上の破壊物とし、人心の推移は國體上の汚點物とし、いちく、猜忌の眼を光らし驚異の耳を歛

の衝突、汽車の衝突、電車の衝突、自動車と荷車の衝突、あけても暮れても衝突たけに衝突して、たゞ古き人と新しき人と摺み合の喧嘩腰に立騒けり、新しき人とは何ぞや、後等みづから稱するところは、社會人生あらゆる總ての舊狀舊態を脱却して新思想と新趣味の權威者なりと叫べど、實は穩健なる舊狀舊態より叩き出されし前科者にして、加之も誠實の意味を有せる新思想と新趣味に迎へられざるのみか玄關拂ひ以上の門前拂ひを喰ひしものなり、今更ら後へも戻れず先へも行かれず世の中の中有に迷ひ心の波の半途に浮かされて、自暴半分の捨鉢に好きな囁言を並べ勝て手な熱を吹くもの、本人どもは頻りに時代の産物なりといへど、時代は彼等を産んだ覚えなしと異議を唱へ、現在の親さへ持て餘して世間體あれば貰ひ子なりと申譯するほどの厄介物なり、

彼等の女流また常に絶えず本能主義を叫び眼前刹那の快樂主義を叫びて、盛に肉の開

放を吹聴し廣告すれば、無人島にでも流されて餘儀なき差對ひにあらざるかぎり、誰が好奇心に彼等の肉を開放されて喜ぶべきや、

時代の新思想も新趣味も、これを鼓吹し奨勵して眞實に導くもの別に其方法と其人あるべし、もし彼等の口より叫ばるゝが如く手軽に安直の社會ならば社會それ一日も保つべからず、もし彼等の絶叫を要し手腕を待つべき世の中とすれば、この世の中は張子細工か糊細工たらざるべからず、

これに反せる古き人また餘りに古過ぎて微臭く死骸臭し、社會は一の活動物にして人間は向上の約束に生れたるを知らず、古下駄の缺け願も物いふ時節ありと心得、はうろくの破片も三年目には用に立つのみを辨へたる外、この駸々たる天下の大勢を解せず、競争場裡の置き去りに逢うて徒らに世を歎じ人を呪ひ、文明の利器は道德上の破壊物とし、人心の推移は國體上の汚點物とし、いち／＼猜忌の眼を光らし驚異の耳を歎

て、動もすれば殆ど敵國にあるが如き感を抱くもの、つまり不平不満の鳴動器たる以外に何等の功なし、

今日の所謂新しき人と古き人、いづれも皆これ精神に異状を來して社會のレールを脱線せるものなり、實際の意味を含まれたる新舊にあらず、自然に要求すべき時代の新陳代謝は、騒がしき狼狽者の狂氣太鼓に囃されず、喧しき慌て者の亂拍子に乗らず、靜に音なく聲なくして大勢の力に抱擁せられ、彼等の夢にも知らざる間に圓滿なる新舊の授受行はる、

小僧ども小女郎ども何を騒ぐ、靜にせよ、あまり調子づけば汝等のためにならぬぞとは、天下の大勢まだ幾分か彼等を愛してのお小言なり、

一 讀 書

活眼を以て活書を読む、これ讀書の最も有功にして最も本意とするところなれど、活眼と活書とは世間普通の一般に望むべからず、

加之も讀書は父兄の兒童に對して教科書を復習せしむるが如き意味の下に世間普通の一般を強ふべからず、もし讀書の餘暇なしといへば、それまでなり、我は學問以外の仕事あり讀書の約束を以て働けるにあらずといふも、亦それまでなり、

讀書を生命とせる學者は別として、讀書を世間普通の一般に奨勵せんとすれば、たゞ面白い本を讀めといふの外なし、

つまり適意の時に適意の書を読み隨意の時に隨意の書を読むべしといふのみ、

されど今日の輕跳浮華なる青年男女には、たゞ單に面白い本を讀めといふべからず、彼等の我を忘れて夜の目も寝ざる面白い本は、ろくでもない本なり、うかく勝手に適意の書を読み隨意の書を読まれては、それこそ大變、とんでもない大間違ひを生ず

るの恐れあり、この點に於ては最も著者の慎重と監督者の注意と出版條例の嚴密なる調査を要すべし、

風俗壞亂と虚榮心の誘惑と危險思想の注入に類せるものは、今日の青年男女その書を讀まざるも既に多少の下地あり、これを讀めば師なくして眼光は紙背に徹し、文字以上で解釋するの力殆ど神の如し、わるいとところに神通力を備へし青年男女の多くして、加之も實行力の大膽なること、驚くに堪へたり、

所謂る藏書家にあらず讀書家にあらずして、他に職業あるもの、讀書は效果の有無に關せず其人の品位を高からしむ、一寸の餘暇なき俗務に忙殺せらるゝもの、そのボツケツトに意外の書籍あるが如きは、血戰の勇夫に一枝の花を挿めるが如くにして益々その人を高くすべし、もし讀書を道樂とすれば、道樂中の最高最善なるものなり、たとひ讀書を睡眠劑とするも、なほ睡眠劑中の最良藥なり、

無用の人と無用の閑談に耽るは、無用の時を得て無用の讀書に如かず、癩に觸る時、腹の立つ時、いまくしい時、ばかしくしき時、苟も人に對うて不愉快を感じる時は書に對うて鬱勃を散じ胸襟を開くべし、

いかに高價なる書籍たりとも、その製本料を差引いて讀書の快と讀書の益とを打算すれば、天下これほど至廉なるものは莫かるべし、

また讀書は寒を忘れ暑を避くるに足る、興に入りて心に注げば、知らずして禪三昧に近づけるが如く、たしかに冬は綿入の一枚ぐらゐる違ひ夏は氷水一杯ぐらゐる飲まずして濟むべき筈なり、

さらに讀書は孤影寂寞を感じずして、獨居に無數の朋友あり、閑居に古今の珍談あり、數千年の昔を今に見るべく、東西各國の歴史を掌上に弄ぶべく、身を天地世界の大に置くも蒼海一粟の小に置くも自由自在なり、これで代價幾何ぞ、十圓紙幣一枚

は藝妓の祝儀に飛ぶ世の中として、あまりに勿體なく氣の毒ならずや、
終日の勤務に疲勞せりとて讀書を廢する勿れ、讀書は人間の疲勞を慰め疲勞を醫する
ものなり、書を読めば肩が凝るといふ人、わざ／＼按摩を備はずして肩の凝らざる書
を読むべし、讀書は讀書の習慣によりて多々ます／＼快感と興味の深くなるものな
り、

讀書癖は、なくて七癖といふ人間の癖の中に於て、最も何よりも善良なる癖なり、
學者に望むが如く別段さらに難しき事を望まず、以上これほど簡易輕便なる理由によ
りて、なほ本を読むが嫌といふ奴、もはや致し方なし、

一 ねごと

ねごとは寢ながら饒舌るもの、起きて居ても満足に一人前の挨拶さへ出來ざる奴が

躰の合間と寢返りの拍子に聲を發して、そも／＼何を辯じ得べきや、
されど寢言のために一家の大事を惹起して、嫉妬喧嘩の果は多年の夫婦別離までする
ものあり、この點より見れば寢言また取るに足らずといふべからず、寧ろ寢言は起き
て白晝に言はれざる秘密を漏らすもの、如し、
昔の武將に謀略の漏洩を恐れて、陣中睡房の衛兵に悉く鐵挺聲を用ひしものあり、寢
言いよく馬鹿にすべからず、
世間の細君、もし強情にして語らざる良人の秘密を知らんとすれば、この寢言を以て
白状さすべし、わけの分らぬ寢言は夢うつゝの斷續なれど、たしかなる寢言は堅く閉
せる秘密の扉その睡眠に弛みて自然に漏れ出づる心の底の響きなり、これを發せしむ
るには良人の熟睡せる時、靜に拵指の腹を以て其熟睡を破らざる程度に良人の鼻の頭
より眉宇の間まで、そつと五六度これを逆に摩擦すべく、もし一夜にして發せざれば

兩三夜、いかに祕密の扉は堅くとも五日間には必ず白状すべし、敢て一家の平和を破壊するにあらず、寧ろ一家の平和を冀ふがためなり、世間の旦那殿たるもの、火の用心よりも猶更ら鼻の頭の御用心御用心、寢言の效能は殆ど是以外になしと雖も、寢言に似たるものは今日の社會さらに多く、いたる所あらゆる階級に擧げて數ふべからず、堂々たる演壇に立ちて公衆に向ひ、前なるテーブルを音高く叩き反身の髯面に靴を踏み鳴らして、はつきりと加之も長たらしき寢言を並べるものあり、彪大の書を著しし取消の出来ぬ文字其は徹頭徹尾その寢言を隙間なく並べて猶まだ目の覺めぬ學者あり、文士あり、長坐無用の席に主人の迷惑も構はず最初から最終まで喋々と寢言の復習をする來客あり、寢言のやうな議論、寢言のやうな談判、寢言のやうな辯解、寢言のやうな講釋、寢言のやうな説明、その他いづれも皆これ捉へどころのない寢言なるが故

に要領を得ざるは勿論、寢言に罪なしとすれば猶更ら以て厄介千萬なり、人間は起きて居る時と寢て居る時と判然たるべし、寢言を家人に聞かるとは餘儀なき次第なれど、白晝わざ／＼他人の前に進み出でて寢言の餘りを聞かすべからず、不得要領の返答は面倒なる相手を避くるために一時の方便とすべきも、自己より喋々と饒舌り立て、不得要領なるは亦これ寢言の交るがためなり、世の中も寢言で濟めば心配なく苦勞なく、天下泰平、家内安全、これはど容易く手軽に面白き事なれど、寢言を以て人生の意味ある言語とすべからず、やはり寢言は寢言にして、責任ある聲は責任ある口より明白に發すべし、

一 ことごと

通俗の文字、ことごととは小言にして、平穩に解釋すれば、小かく丁寧に言葉を盡して得

わけて親の子に對し良人の妻に對する小言は、猶更ら以て常に小言の無用ならざる注意すべし、つまらぬ小言責めは却つて案外の大事を惹起すべく、とんでもない大間違ひは多く小言の結果に生ず、
いつ何時、誰にもいへる小言は實に人間の大切なるものなり、一片の小言を以て生涯の訓戒にあらず僅に一年の効果あらしむるもの、これさへ萬卷の書を講ずるよりも難し、

一 ひがみ

ひがみは事々物々に對する曲説曲解の意味にして、ひがみ根性またゆがみ根性に通ず、まッ直に平なるべき心の横に拗けて凸凹を來せしものなり、
ひがみ根性は人間一代の大損失にして、ひがみ根性なるもの生れて死に至るまで、知

己なく朋友なく、平和なく快樂なく、幸福なく味方なく、つまり世の中の繼子なり、世の中は繼子扱ひせざるも、自己みづから繼子根性を起して強ね廻り、強ね廻る結果は竟に世の中より己むを得ず實際の繼子とせらるゝに至る、
結局は自業自得なれど、元來の繼子でもない奴が竟に實際の繼子扱ひせらるゝがため、さらぬも淡泊ならざるひがみ根性ますゝひがみて水飴の如く、べたくと蒼蠅く何事にも粘り、にちやくくと氣味わるく何物にも附き纏ふ、悪人は感化すべき道あるも、ひがみ根性の薄氣味わるく粘り強い奴、どうも斯うも致し方なし、
經驗に富める小學校の教員は、その教場に始めての生徒を引受けし時も、三日の後は必ず父母なき孤子と他人に養はれたる繼子を知るといふ、まして可憐無慾の兒童ならざる社會の人間として、いちく利害得失の競争場裡に試験せらるゝもの、その繼子根性に似たるひがみ根性は到底これを掩ふべからず、實は掩うて貰ひたきものなれ

ど、本人ますます顕かに拗ねて出るがため、いよく以て度し難し、
 いかにかに誠意を以て交はるも、いかにかに眞實を以て運ぶも、ひがみ根性の人間その誠意と
 眞實を感謝する能はず、寧ろ反對に猜み反對に疑ひ反對に恨み甚しきは敵意を含み
 て復讐の念を生ずるものあり、
 ひがみたる人の心には花も月も不平の種となりて、雨と風は猶更ら自己のみに多く吹
 き多く濡れたりと思ふが如し、また憐れならずや、
 ひがみ根性は人の親切を受け得ざるのみならず、天の賜物を受け得ざるものなり、
 醫學の進歩に従ひ精神病の研究また緻密に達せる今日、人生この不幸なるひがみ根性
 をひがまざるもの、血液注射によりて全治する方法なきや、世の中には一面まだ踏
 まれても蹴られても夢うつゝに何の反響なき無神経の動物ありて、これも同じ社會の
 持餘し者なり、

— うらみ

うらみは怨恨にして、怨恨の文字は醜惡の文字なれど、この怨恨を善用すれば、一種
 の競争心となり獨立心となり反動力となり奮闘力となりて、また所謂遺恨十年に一
 劍を磨するの快もあれど、世間の多くは只これ過ぎ去りし事に對する愚癡のうらみだ
 けにして、加之もうらみに添ふべき實力の養成なく實力の用意なし、
 恨むべからざる事を恨みて、この恨を報ぜんとするは、あきらかに固より人間の罪惡
 なれど、恨むべき事は大に恨みて大に恨みを返すの力を養ふべし、必ず返すべしとい
 ふにあらず、返すに餘りあるだけの力を充分に養ふべしといふのみ、いかにも残念な
 り心外なりといふ恨みの念を忘れずして奮闘の目標とする所以なり、
 この力を首尾よく養ひ得れば、會て恨みのある奴、もはや實際に恨むほどの敵でもな

し、冷笑一番、その後は君どうしたと軽く肩を叩いて多年の溜飲を下ぐるに足る、もし前非後悔するか乃至また落魄悲境に泣けば寧ろ助けてやるべし、男子これぐらゐの意氣と雅量なくして世を立たるべきや、
たゞ恨めしく恨みぬいて其まゝ恨み死に死するやうな奴は、かはいさうなれど、化けて出ても怖くなし、

恨むべからずとは、絶えず宗教家に教へられ道徳上に戒めらるゝところなれど、ありのまゝ眞實に大膽に露骨に告白すれば、人として恨むべき事に恨まざるものなし、只これを制すると制せざるのみ、

旭に向ふ霜の如く消えて跡なく制し得れば可なり、もし制し得ざるものとすれば、その恨みを以て一個の的とすべし、敵に復讐すべからざるも自己に復活すべし、實は恨みを返すだけの力も養ひ得ざるもの、たとひ徳を受けても徳に報ゆるだけの力

もなし、

善惡ともに遺忘性の最も早きものは人生の萬事に於て最も薄弱なるものなり、

一 墮落

いたるところ近來の頻々として耳にするものは、成功の半面に聞ゆる墮落の聲なり、

或者は自己の主義に反せるものを墮落とし、或者は自己の趣味に反せるものを墮落とし、或者は只これ漠然たる感情の下に好かぬ奴と嫌な奴とを悉く墮落とし、或者は自己さへ逆も企て及ばざる高き理想を掲げて殆ど世間一般を墮落せりと歎じ、甚しきは猿の尻笑ひに等しく互に相呼んで墮落の塗り合をするものあり、

されど今日の世間に叫べる墮落の意味は、多く酒色に關して自己の職を缺き自己の業に荒み自己の品位を傷つけ本分を忘るゝものをいふ、

加之も墮落の一語、近來これを青年男女に限れるが如く叫ぶものあり、いかにも今日の青年男女は墮落の事實に於て驚くべき多數を有せりと雖も、墮落は彼等のみの特産物にあらず、墮落を以て悉く彼等の罪に嫁するは頗る酷なり、大盜は常に隠れ小盜は絶えず捕へらる、實は今日の青年男女よりも寧ろ家を成し名を爲せるものに却つて多し、數に於て量に於て罪に於て、もし深酷に評すれば、墮落を責めらるゝ彼等よりも、墮落を責むべき方面に猶更ら墮落の事實は多し、これを以て青年男女の墮落を許すべからざるも、叱るものと叱らるゝものゝ比較を顛倒せり、青年男女は世間の評判に上り易く、新聞紙上の記事に現はれ易く、父兄の耳に入りて騒がれ易く、學校の教師監督に知れて驚かれ易く、従つて猶更ら社會の問題となり易く、加之も人生の經驗なく意志の鞏固ならざる青春脆弱の身を以て自暴自棄に陥り易し、

いはゆる近來の不良少年なるもの、不良の實行力そもくいつこより學び得たるもの多きや、その真相を嚴密に調査すれば、或は調査するもの寧ろ却つて反對に調査せられざるを得ざるの奇觀と滑稽を呈すべし、徳義を叫ぶもの果して徳義の君子なりや、家庭の圓滿を説くもの果して家庭圓滿の主人公なるや、花柳の巷を以て現世の魔界と喝破するもの果して其魔界に案外の知己あらざるか、青天白日の下に大道の雜沓を驚がして縦横に疾驅せる自動車を見よ、悉く敬意を拂ふべき社會有用の人物にあらず紳士の急用にもあらざるべし、汽車汽船の一等室に喃喃たる美人は必ずしも夫人令嬢にあらざるべし、用なくして別荘に贅澤なる女、小間使と稱して朝夕その傍らを去らざる女、何の營業もなき洒落の家に猫を抱き狎を愛して紅粉これ事とする女、その他いづれも一指を動かさずして心のまゝに華美を盡し得る女は、果して何物の養ふところぞ、避暑避寒の温泉に旅行に夫婦の名を記

するもの、果して悉く實際の夫婦なるべきや、
 既に家を成し名を爲すもの、今日これを以て人生の誇りとし歡樂の極まりとす、その
 家庭より出でし青年男女、その子弟に生まれたる青年男女、さらに地方より來りて都
 門の華奢に酔ひ洛陽の色彩を羨むもの、この包圍中にありて燃ゆるか如き情を押へざ
 るべからずとすれば、押へ切れずして墮落の淵に臨める青年男女を罪するの前、まづ
 罪すべきものあり、

まだ年も若いくせに生意氣な奴といふ一語は、以て彼等を謝罪せしむるに足らず、け
 しからん奴といふ一喝は、けしからんの一喝を以て彼等を震撼せしむべき人物たらざ
 るべからず、

言語道斷も言語道斷を叫ぶだけの人間たらざるべからず、うかく墮落の講釋も出來
 ざるものが、その子弟に向うて墮落を責むべき資格なし、

されど以上は墮落せる青年男女の辯護にあらず、一方に對する必要上より勢ひ多少の
 辯護に似たる符合點ありとも、墮落は墮落なり、

たゞ今日の青年男女たるもの、これほど四方より墮落々と叫ばれ責められて何とも
 なきや、あまり叫び聲の大なるに腹は立たざるや、あまり責めやうの嚴しきと激しき
 に聊か癢に觸らざるや、

願はくは大に腹を立つべし、願はくは大に癢癢を起すべし、大に怒り大に激して、今
 日の不埒千萬なる阿爺どもを倒に膝詰談判の意見すべし、但し逆寄せに罵倒し意見す
 るだけの青年男女となりて後の事なり、

あやまりて改むるに憚る勿れ、既に墮落せしもの墮落より脱して、まだ目の覺めぬ禿
 頭の阿爺どもを、ぎり／＼いはすべし、

一 姦淫

姦淫は醜行中の最も醜惡なるもの、これを筆にするも不快なれど、不快と醜惡なるが爲め、却つて筆にせざるべからざる理由あり、

姦淫は未婚男女の肉交にあらず、いふまでもなく夫婦の間にあらず、夫婦おのゝその以外に於ける不倫の姦淫にして、いはゆる姦夫姦婦なり、

近來、殆ど放縱を極めたる戀愛説の結果、動もすれば或一部の論者より人間の情慾は自然の發動なるがため、如何なる場合も人間の力を以て制すべきものにあらずといふが如き危険の聲を發し、またこれを人間の本能たるが如く心得て喜び迎へんとするものあり、

甚しきは夫婦を以て社會の強制的に行はるゝものとし、さらに一夫一婦を以て男女

の満足なる意味にあらずとし、その最も甚しく露骨なるものは人類の自由に伴ふべき道徳と法律の進歩は竟に姦夫姦婦を罰せざるの時代あるべしといふに至る、

いづれの世にも狂人は絶えざれど、近來の狂人は精神の異狀を來すに一種の危険思想を帶び、加之も手足を縛し檻を要すべき狂態にあらずして世間これを自由自在に放てるがため、猶更ら油斷すべからざる恐れあり、

かゝる狂人ならざるも、今日の若き男女に最も憂ふべきもの戀愛は神聖なりといふ金看板の下に實は情慾の血を狂せる肉を躍らせ、その情慾の發動に對して何等の修養心も自制力も加へず、これを盛に唱へて盛に行ひ、あらゆる方面に手當り次第の醜態を恣にし、殆ど一時は人間と獸類との境界を茫漠たらしめんとするものあり、

この醜態中より出で來りて、この男女おのゝ雙方より最後に相伴ひしもの、これ夫婦なりとすれば、既に寒心すべきものを含めり、その夫婦いづれか一方の冷かなる時

露顯せざる限りに於て何を憚り何を恐るべき、勢ひ他に向うて新なる暖を求むべし、
 姦淫の罪こゝに起る、

世に姦夫姦婦として曝さるゝもの、多くは境遇の低き思想の低き無智文盲の徒なれど、
 法律上、姦淫は告訴を待って罪すべしといふ條項の下に、寧ろ案外の身分と教育ある
 ものからず潜めり、

姦夫となり姦婦となるの動機に就ては頗る興味ありて加之も最も緻密なる心理状態の
 解剖せしものあれど、著者こゝに至りて俄に躊躇せり、これを載せて公にするの利よ
 りも害に忍びず、こゝに本文の百二十八行を削る、

今日の戀愛思想と戀愛放縱の結果は、以上の理由と以上の統計表を見よ（抹殺百二）こ
 の争ふべからざる事實上より必ず竟に多くの姦淫者を産み出すべく、加之も竟に産み

出さるべき姦淫者は由來の單純なる姦夫姦婦にあらずして、最も巧みなる方法の下に
 最も大膽なる醜惡を恣にし、加之も法律上に告訴の道なく道德上に詰責の道なから
 しむ、

これを以て寧ろ戀愛の自由を遺憾なく擴張せりといはゞ論なし、苟も姦夫姦婦を以て
 人倫の上に許すべからざるものとすれば、今日の所謂る戀愛鼓吹者は或意味に於て姦
 淫罪の製造者なり、

一 一家の主人

一家の主人とは、圓滿なる家庭の主人公にして、その境遇と程度に應ぜし一家の幸福
 を目的とす、

朋友知己の間には絶えず愛敬者を以て迎へられ、本人また常に滑稽百出の名物男たれ

ど、家に歸れば案外の眉を顰め目を欬て、別人の如く、事々物々に家族を吐り飛ばし睨み廻すものあり、これを俗に内入の悪き人といふ、
また事業上の失敗損害も交際上の不平不満も其他あらゆる世間一切の癩癩玉を家に持歸りて何事も知らざる家族の面前に爆發せしむるものあり、これを八當りの旦那殿といふ、

或は思案抛首に半泣きの澁面を作りて、いはすとも其まゝ濟むべき家族に入らざる無用の心配させ、或は其場に何の必要な嘘八百の手柄話を聞かせて夢のやうな一時の糠よろこびに忽ち後悔させ、或は外で勝手に酔ひし酒の介抱を家族に命じて不足を並べ、或は時ならぬ不意に歸りて用意なき膳の上に小言の山を築くが如き、その他いづれも門外より家族の喜ぶべき土産を携へ來らずして家族の苦しむべき材料のみを携へ來るもの、一家の主人としては完全なる主人公にあらず、自己の家を灰吹同様に心

得たる主人公なり、

内と外とを混同すべからず、家族に對すると社會に對すると同じ理窟を以て當るべからず、たとひ門外一步いかなる苦痛ありとも、家にありては徹頭徹尾その身の溫和なる主人公として、家族のために幸福の中心點たるべし、
外では鬼とも組むべきほどの男、内に入りて小兒と戯るゝが如き主人公たるべし、外では悪戦苦闘の勇將として働き、内に入りては細君に寢坊助と笑はるゝも可なり、外では侃々諤々たる議論家を以て稱せられ、内に入りては下女に一本まるるゝも亦これ滑稽なり、外では喜怒を色に表はさざるもの、内に入りて面の雜作を一時に崩すも差支なし、

あまり儼然として家長の権力を振廻す主人公たるよりは、家長の権力を振廻すべき必要なき一家の主人公たるべし、あまり四方に目を配り過ぎて萬事に油斷なき主人公た

るよりは、聊かの小事は知らぬ顔に打過ぎて急所の大事に抜目なき主人公たるべし、恐れて敬せらるゝ主人公たるよりは、馴れて侮られざる主人公たるべし、家族のため考へて後に相談せらるゝ主人公たるよりは、即刻ありのまゝに打明けて萬事を相談せらるゝ主人公たるべし、

家族を厄介物として養ふべからず、我家族なればこそ我意に従ふものとして養ふべし、家族の生命は我ために繋けるものと思ふべからず、寧ろ或意味に於て我こそ家族のため生命を保てるものなり、

また一家の主人は一家族を乗せし船長にして、一家族たゞ船長を力に浮世の荒波を凌げるもの、その不安を與ふるも平穩を與ふるも船長の航海術にあり、

一 社會の一人

門外一步は社會なり、

いたるところ青山あり知己ありといへど、家を出づれば我所有地にあらすして皆これ他人なり、他人の集合體に只これ一個の我として交はる、夢にも依頼心を起すべからず、

加之も社會は間斷なき激烈の競争場裡なり、我また競争場裡の一人として加はる、うかくすれば踏み殺さるべし、

他人は悉く敵ならざるも、他人は悉く味方にあらず、社會は敢て我一人を冷酷殘忍に取扱はざれど、社會は敢て我一人のため特別の好意を以て迎ふべき筈なし、

この他人に跪いて哀訴すれば、たとひ一時を救はるゝ事ありとも、それがため既に競争場裡より追ひ退けられし我なり、この社會に強ひて歎願すれば、たまく多少の餘地を與へらるゝ事ありとも、理由なくして與へられしもの用あらば直ちに取返さるべ

し、つまり他に向うて救助と僥倖を得るは人間の最も不安なる露營の睡眠なり、あくまでも我は我一人の覺悟を以て進まざるべからず、妻子眷族の多きため他人は我に向うて競争を停止すべき筈なし、あくまでも我は我一人の決心を以て處せざるべからず、失敗のため不幸のため社會は我に向うて損害を辨償すべき筈なし、我一人のために存在せざる他人の助力を理由なくして受けんとするもの、我一人のために組織されざる社會の地位を働かずして取らんとするもの、あまり蟲の好過ぎたる注文なり、

他人は我ために手をあけて待てる助け舟にあらず、社會は我ために席を設けて待てる歓迎場にあらず、寧ろ他人は我を掻き退けて走せ去るものなり、寧ろ社會は我に難問を發して試験するものなり、その他人に助け舟の用意なきを恨み、その社會に歓迎の席なきを怒るは、恨むものと怒るもの、無理なり、

禮儀禮讓、友誼友情、同感同情、その他あらゆる總ての交際上に於ける人間の美德は社會これを平和のために絶えず要求すれば、その要求せしところは頭割の平均に施さんとするものにして、我一人これを他よりも多く取るを許すべからず、

社會また我ために種々かぎりなき報酬物は貯藏すれど、相應の代價を拂はずして與へらるゝ剩餘物は一品もなし、

さらに社會の進歩は、なるべく我を伴はんとすれど、我一人のために他を捨て、手を引くの約束なく、ぐづぐづすれば其まゝの置き去りに進むべし、

また我は社會の組織後に生れて、社會は我より先に組織されたるものとすれば、後より生れたる我手を以て先に出來たる社會の自由自在ならざるは當然の理なり、まゝならぬ浮世を歎ずるもの馬鹿の骨頂なり、

社會は常に警めて曰く、汝は汝の力によりて生存すべし只その生存を保護すべき任あり

るのみと、他人また冷かに顧みて曰く、お前さんの事まで世話の届く暇なしと、その社會に向うて保護以上の生存料を強請するもの、その他人に向うて逆も届かぬ世話してくれと迫るもの、貸さぬ金を返せといふ没理漢なり、この冷酷なるが如き社會にありて、この頼みにすべからざる他人と接し、我たゞ一人の力を以て渡る、心細しといふ勿れ、人間こゝが却つて最も自己を立つるに最も手應ありて最も面白き點なり、

一 運 命

昔より今に至るまで、絶えず常に其正體を捉へんとして、いまだ會て捉へ得ざるものは運命なり、

其正體を捉へ得ざるのみか、いまだ會て其正體を見届けしものさへなし、

運命それ化物なるか、

由來この運命に對する講釋と解釋は種々あれど、その講釋と解釋は實際上さらに何の功なく、やはり運命に翻弄せられ運命に支配せらる、

萬事その場の運次第、もはや成行の運命に任すのみ、天なり命なり、運命なれば致し方なし是非もなし、運のないものと諦めるより外なしとは、皆これ人間の運命に降参せる證據なり、あまり心外千萬に残念ならずや、

何とかして運命を引ッ捕へ運命を叩き倒し運命を捻ぢ伏せ運命を組み敷き運命の咽喉笛を絞め付けて、二度と再び我々人間を馬鹿にせざるやう、第一此奴のために無念の涙を呑んで往生せし幾千萬人の恨みを報じ敵を取つてやりたし、

されど運命の奴、べろりと舌を出して曰く、人間どもの手に終へて堪るものかと、そもく運命は逆も人間の手に終へざるか、もし人間の手に終へざるものとすれば、

人間この運命に對して如何なる態度を保つべきや、思へば思へば癩に觸る奴なり、考ふれば考へるほど腹の立つ奴なり、されど癩に觸へて向へば猶更ら面白がりて人を馬鹿にし、腹を立て、向へば益々その大口を開いて人を笑ふ、

この上は癩に觸へず腹も立てず、もはや敵とならずして味方となり、運命に反するよりも運命に愛せられんとすれど、運命の奴また頗る得手勝手に人間を選好みして、味方するがため誰彼なしに愛するといふ温順な奴にあらず、敵として逆も叶はず、味方となりても愛せられず、人間いよく策に盡きたり、策に盡きたるところ運命といへば、やはり運命に弄ばれしものなり、運命、運命、人間これを左右する能はざれば、せめて運命の正體なりとも見届けたし、

運命は人間を離れて運命あるべからず、運命は人間の外にありて人間を支配すべきものにあらず、人間の世に處し事を行ふ時、その勢ひに乗じて進むところ、これ即ち運命のあるところにして運命これ機會なり、運命の神は後頭に禿けて毛髮なしとは、一たび去りて引戻し難く、その機會を失へば再び來らざるをいふ、時を得れば鼠も虎となり時を得ざれば虎も鼠となるの語は、機會に乗ずるもの天下の英雄となり、機會を失ふもの陋巷に窮死するが如きをいふ、されど人力を盡せば必ず運命の來るべきものにあらず、人力を盡して天を待つとは、人力を盡して運命の支配に任すといふ意味にして、この點より見れば、運命また人間を離れて人間の外より人間を支配するが如し、さらに同じ道を歩みて物を落すものと拾ふものあるは、落すものと拾ふもの、前後に

歩むがためなりといへど、その前後に歩むは既に運命なり、同じ力を以て同じ事に當れど、成るものと成らざるもの、あるは、世間の事實上に於て猶更ら運命の人力以外にあるを知るべし、一面より見れば運命これ人間の力にあるが如く、一面より見れば運命これ人間の外にあるが如く、そもくいづれを運命の居處とすべきや、

また更に或點より見れば、いかなる人間も運命を取外すものなく、運命は敢て人間を呪へるものにあらず、寧ろ運命は必ず人間に幸すべきものにして、只その幸を授受する間に分量の相違あるのみ、
 靜に人間の生涯を顧みれば、誰か一度の全盛期なかるべき、我は不幸に生れたりといへど、その不幸中に最も不幸の薄く浅かりし時は即ち其人の全盛期なり、あれほど働いたが三萬圓以上を得た事なしといふ、その三萬圓その人の頂上點なり、多年これ

ほど惡戰苦闘し來りて僅に一家を支へたるのみと不足がましくいへど、その人その一家を無事に支へしは不足にあらず幸運の最極點なり、
 不幸も不運も他人に比較せる不幸不運にして、他人に比較すれば大小深淺の差ありと雖も、自己たゞ一人こゝに自己の生涯を見れば、いづれか一度は必ず運命に幸せられしものなり、常に飢ゑたる乞食さへ生涯に五六度は貰ひ過ぎて、腹鼓を打ち喰ひ餘りて捨場に困る時ありといふ、彼等にも運命は笑ひを禁ぜず快樂を奪はず、呵しき事あり娛しき事あり戀もあり情もありて、いはゆる乞食も身祝ひの語は、たしかに目出たき事のあるべき證據なり、
 この理より見れば運命これ幸福にして何人にも漏らさず與ふれど、只その幸福は人間の程度に應じて深淺あるのみ、分配の深淺大小は運命にあらず、運命の寄與は既に濟んで、これを取る人力の奈何にありといふべし、

かくの如く詮じ來れば、運命また恐るゝに足らず、運命また驚くに足らず、運命は人間の力量次第なり、

また或點より見れば、運命の神これ惡魔の神なり、いかなる人間にも襲ひ來りて號泣せしめ、いかなるところにも攻め寄せ來りて、もし全體を碎き得ざれば必ず一角を碎き去る、

金力と勢力に満てる富貴の家には、金力と勢力とに防がれざる病弱と夭折の外さらに思はぬ不意の災難あり、智力と勇力に満てるものは、その智と勇の及ばざるところに乗せられて夢にも知らざる意外の災難あり、人間の最も尊きもの身を殺して仁を爲すといへど、身を殺さずして仁を爲すの全きに達せしめず、義のために盡せど義のために酬いられず、善人その生涯を地獄の如くに苦しめらるゝものあり、公明正大の人そ

の生涯を闇黒に葬らるゝものあり、火難、水難、病難、盜難、その他に於ける總ての難は、決して人間の不用意と不注意のみにあらず、これに逢ふと逢はざるものゝあるは争ふべからざる事實にして、その事實を運命の業とすれば、人間の災厄は悉く運命の業といふべし、

こゝ理より推せば、人間の不可抗力に禍せらるゝもの、乃至また善因善果の反對を生ずるもの總て運命これ惡魔の翻弄に似たり、

運命の文字、その運の字は、はこぶ、うつる、うごく、めぐる、ゆく、いづれも停止せざる意味にして、これを人間の力とすれば、はこび、うつし、うごかし、めぐらすの意味となれど、命の一字これを人間の命するまゝになるものと解釋するは、あまり不用意に勝手過ぎたり、たゞ命これに従ふの意にして、命は天なり、人間その人間以

外に於ける天に従ひ命に従はしめらるゝこと多し、
 最も簡單にして立證の明白なる實例は、火災保險に數年來の保險料は一度も滯らず正
 直に拂ひ込みしもの、餘儀なき要用のため一朝その掛金を怠りて、怠りし日に忽ち丸焼
 となりしものあり、いろ／＼に勧誘せられし後、いや／＼ながら義理に迫りて已むを
 得ず契約せしが、契約の調印いまだ乾かざるに焼けて保險料の丸取せしものあり、卑
 近なれど此實例は人間あらゆる方面に互りて人間あらゆる方面に免るべからず、
 運の弱きものは最も強かるべきところに却つて弱く破壊せられ、運の強きものは最も
 弱かるべきところに却つて強く意外の幸福あり、
 惡運の強きものには神も崇らずといへる諺は、善人も智者も運の弱きものは自由自在
 に翻弄せらるゝ意味なり、
 首尾よく難關を切りぬけて誇れるもの、人に過ぎたる力量者のみにあらず、試験に及

第せるもの必ずしも優等の學生にあらず、試験に落第するもの必ずしも劣等の學生に
 あらず、同じ池に釣を垂れて大魚を獲るものと小魚を得るものと一切さらに終日の獲
 物なきものあり、氏なくして玉の輿に乗るもの豈それ美人のみならんや、
 富に生れ貧に生れ貴き家に生れ賤しき家に生るゝもの、その生るゝに於て既に餘儀な
 き運命なり、その生るゝ時より既に餘儀なき運命を擔うて來る、死して名を遺し功を
 稱せらるゝもの、亦これ運と不運あり、その生と死の間に活動せる人間の一代に運命
 の大小厚薄なかるべきや、また同じ運命の強きものも、一時に得るものと永久に得る
 ものとの差あり、つまり生涯一度の總勘定に渡さるゝものと年割月割日割の分割的に
 渡さるゝものあり、
 生涯一度の總勘定に渡さるゝものは生涯の苦痛を一時に取返して我も世間も意外の
 幸に驚き驚かるゝもの、これを分割的に渡さるゝものは、人を驚かして一時に盛な

らざるも、ふしぎに衰へずして常に絶えず窮せざるものなり、
 さらに最も運命の強きものは、二重の好運を一時に併せ得て、重ねぐの幸福に逢ひ、
 さらに最も運命の弱きものは、二重の不運を一時に脊負ひ込んで、重ねぐの災難に
 逢ふ、笑うた顔を牡丹餅で叩かれるもの、泣面を蜂に刺さるゝもの、とんく拍子に
 善くなるもの、とんく拍子に悪くなるもの、いづれも皆これなり、

結局、運命は人間の外にあり、

結局、運命は人間の自由ならざるものなり、

人間の奮闘心を銷磨せしめざるがため、いかに運命を度外視せんとするも、人間の進
 歩力を弛緩ならしめざるがため、いかに運命を無用視せんとするも、結局、運命の人
 力に及ばざるは餘儀なき事實上これを争ふべからず、

もし運命を大なる高きところより見れば、わざと人間に與へられし不可解の難問題に
 して、この問題を解決せしめんがために人間の努力を呼び人間の進歩を招ぐところ即
 ち是れ運命の目的なるが如し、

いづれにせよ、現在の事實は、この運命なるもの、人間以外より來れる何物かの分配
 法なり、人間の分配法ならば人間これに向うて争ふべきも、人間以外より來れる分配
 法を奈何せん、その分配法に不平不満あらば、宗教上に濟度せられ道德上に慰安を求
 むべし、

結局、運命は人間の外にあるがため、人間これと戦はざれば我に對する運命の力を知
 るべからず、結局、運命は人間の自由ならざるがため、その自由ならざるところに寧
 ろ勇を鼓して戦ふの價値ありといふべし、

宗教上にも濟度を求めず道德上にも慰安を求めず、これに向うて戦ふの勇氣もなく決

心もなくして、たゞ徒らに空しく運命の餌食となり運命の犠牲物となるが如きものは、
自己の生涯を大道の賣卜者に託して充分なり、自己の生涯を加持祈禱の行者に託して
も可なり、

わかりきった事よりも、どうなるか、わからぬ運命に向うて奮闘一番、やれるだけ遣
つて見るも、またこれ寧ろ人間の痛快事ならずや、

つまり運命を人間の痛快事として、これに泣かず、これに驚かず、これに凹垂れず、
たとひ叶はざるものと見るも、遁け出せば却つて追はるべく、いよく、叶はぬといふ
間際まで、多少はヤケ氣味を以て進むべし、どうせ叶はぬ以上、もはや捨鉢に奮闘す
るも面白からずや、

浪六全集（第九編）終

大正十五年二月五日印刷
大正十五年二月廿日發行



著者 村上信

發行者 東京市日本橋區本石町三丁目十四番地 加島虎吉

印刷者 東京市小石川區久堅町百八番地 村上新輔

人間學

定價金貳圓

印刷所 株式會社博文館印刷所

發賣所

東京市日本橋區
本石町三丁目
東京市日本橋區
住吉町二番地
東京市本郷區
本富士町二番地

電話 大手一三三六番
振替口座東京一七四四番
電話 浪花一四九〇番
振替口座東京一六三六番
電話 小石川七五〇三番
振替口座東京一六九四番

至誠堂書店
至誠堂第一分店
至誠堂第二分店

浪六全集

縮刷

浪六先生の傑作
興味津々の快著

新式ポイント組
袖珍箱入美本

各册金二圓

(郵税十銭)

- 第一編 ■ 當世五人男 ■
- 第二編 ■ 黒田健次 ■
- 第三編 ■ 上田力 ■
- 第四編 ■ 倉橋幸藏 ■
- 第五編 ■ 川上三吉 ■
- 第六編 ■ 吉田雄藏・花車 ■
品さだめ
- 第九編 ■ 人間學 ■
- 第十編 ■ 八軒長屋 ■
- 第十一編 ■ 八軒長屋後篇 ■
- 第十二編 ■ 八軒長屋續篇 ■

550

57

終

